

群集の行動とディスポゼッションの理論：
ヴァイマル共和国時代の群集表象の批判的再検討に
むけて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学研究科表現文化学教室 公開日: 2017-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 海老根, 剛 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006532

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	群集の行動とディスポジッションの理論：ヴァイマル共和国時代の群集表象の批判的再検討にむけて
Author	海老根, 剛
Citation	表現文化. 10 巻, p.41-65.
Issue Date	2017-03
ISSN	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学研究科表現文化学教室
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

群集の行動とディスポゼッションの理論

ヴァイマル共和国時代の群集表象の批判的再検討にむけて

海 老 根 剛

1. 群集の言説史と新たな抗議運動

ペーター・スローターダイクは、2000年に出版された小著『群集の侮蔑』(*Die Verachtung der Massen*)のなかで、ヘーゲルの『法の哲学』(1822年)の一節を参照しながら、群集という主題が近代社会に固有の「文化闘争」と結びついていたことを指摘している¹。『法の哲学』のなかでヘーゲルは、「みづからの君主を欠いた人民、したがってまた全体の必然的かつ直接的に連関し合う編成を欠いた人民は、形のない群集にすぎない。それはもはや国家ではなく、(…)自己のうちで形作られた全体が持つとされるいかなる規定も欠いている」²と述べている。このように指摘することでヘーゲルは、君主を廃し人民を主権者として位置づける民主政に立脚する近代社会が、群集を主体として展開するというプロジェクトと不可分であることを明言したのだった。そして、このプロジェクトは、不可避免的に近代社会に固有の文化闘争を呼びさますことになる。「群集が主体となり、意志と歴史を手に入れるとき、観念論的な慇懃無礼さの時代は終わりを告げる(…)。群集に主体性あるいは主権が可能であるとみなされると、意志、知、精神などの主人の形而上学的な特権の数々が、以前には単なる材料でしかないように思えたものの中へと浸透していき、隷属させられ、誤認されてきた

1 Peter Sloterdijk: *Die Verachtung der Massen*. Versuch über Kulturkämpfe in der modernen Gesellschaft. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 2000, S. 9ff.

2 Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Grundlinien der Philosophie des Rechts*. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1985, S. 477. 強調原文。

側に、反対側にいる者たちが享受してきた尊厳を要求する権利を与えたのである」³。したがって、近代社会に固有の文化闘争は、群集の主体性の承認をめぐる争われることになる。そこでは身分制社会において秩序化の原理であった垂直的な差異を保持しようとする勢力と、そうした所与として「見出される」差異を原理的に解消可能な「作られた」差異へと水平化しようとする勢力が対峙する⁴。スローターダイクが語る「群集の侮蔑」とは、群集に対して主体性の承認を拒否する身ぶりを意味している。

すでに 19 世紀には群集が学問的言説や文学作品の主題として注目を集めていたイギリスやフランスと異なり、ドイツにおいて群集が本格的に主題化され始めるのは 20 世紀初頭になってからである⁵。そして、群集に関する学問的言説と文学的表象が大量に生み出されるにいたったのは、ヴァイマル共和国の時代（1918–1933 年）であった。敗戦と革命によって突然身分制国家から民主政に移行したヴァイマル共和国時代には、上述の文化闘争が先鋭化するとともに、群集が多くの知識人や芸術家にとって切迫した問題として浮上したのである。したがって、たとえ群集があらゆる近代社会に付随する文化闘争と結びついた形象であるとしても、ドイツにおける群集をめぐる言説と表象の発生および展開は、ドイツに固有の歴史的文脈の中で生じている。ドイツ語における *Masse* の概念が孕むことになった意味の広がりや機能は、それをドイツの歴史的・社会的文脈の中で考察するときのみに、十全に把握可

3 Peter Sloterdijk: a. a. O., S. 9-10.

4 Ebenda, S. 54ff.

5 ギュスターヴ・ル・ボンの『群集心理学』がウィーンの哲学者ルドルフ・アイスラーによって最初にドイツ語に翻訳されたのは 1908 年のことである。同じ年にジンメルは『社会学』の中で群集の問題を論じている。また社会民主党の中心的な理論家の一人カール・カウツキーは 1912 年に革命と群集の関係を論じた「群集の行動」を発表した。文学作品では、革命的群集を主題にしたゲオルク・ハイムの短編小説「10 月 5 日」が 1911 年に執筆され、大都市の群集を主題化した一節を含むライナー・マリア・リルケの『マルテの手記』は 1910 年に発表されている。

能となる。こうした問題意識から、筆者はこれまでヴァイマル共和国時代のドイツに時間と空間を限定して、群集をめぐる理論的言説と文学的表象の展開を考察してきた。そこで目指されたのは、歴史的に限定された言説空間にフォーカスすることで、群集という主題をめぐる演じられる、学問的言説と文学的实践との緊張に満ちた相互作用を解明することであり、さらにそうした緊張関係にも関わらず両者に共通する思考の枠組みの変転を明らかにすることであった⁶。

一方、近年、世界各地の大都市において、多くの人々を巻き込んで展開する新たなタイプの抗議運動が生まれ、社会に対して大きなインパクトをもたらしている⁷。そして、そのような現実に応答するかのように、政治哲学や社会理論だけでなく、美術史、映像論、パフォーマンス研究をも含む幅広い研究分野で、多数の人々が共同で行う行動とその政治的ポテンシャルに対する関心が高まっている⁸。そうした近年の研究では、「群集（大衆）」（Masse,

6 海老根剛「忘我・交通・形象 ヴァイマル共和国時代のドイツにおける群集論の展開」（博士論文）、東京大学、2008年。同様にヴァイマル共和国時代の群集表象に対象を絞った数少ない研究として、次の二つを挙げることができる。Anette Graczyk: *Die Masse als Erzählproblem unter besonderer Berücksichtigung von Carl Sternheims »Europa« und Franz Jungs »Proletariat«*. Tübingen 1993. Regine Zeller: *„Einer von Millionen“ Masse und Individuum im Zeitroman der Weimarer Republik*. Heidelberg 2011.

7 代表的なものとしては、スペインの15M運動、いわゆる「アラブの春」と呼ばれたチュニジア、エジプトなどの一連の民主化運動、アメリカ合衆国のオキュパイ・ウォールストリート運動、トルコのタクシム・ゲジ公園における抗議運動などがある。

8 例えば、以下の著作を参照のこと。Judith Butler, *Notes toward a Performative Theory of Assembly*, Harvard University Press, London, 2015. Judith Butler and Athena Athanasiou, *Dispossession: The Performative in the Political*, Polity, Cambridge, 2013. Jodi Dean, *Crowd and Party*, Verso, London New York, 2016. Bojana Cvejić and Ana Vujanović, *Public Sphere by Performance*, b_books, Berlin, 2012. Kai Van Eikels: *Die Kunst des Kollektiven*. Performance zwischen Theater, Politik und Sozio-Ökonomie. München (Wilhelm Fink) 2013. George Didi-Huberman, *Uprisings*. With Essays by Nicole Brenez, Judith Butler, Marie-José Mondzain, Antonio

crowd)ではなく、「マルチチュード」(multitude)、「集会」(assembly)、「集団」(Kollektiv)、「人民」(the people)といった概念が用いられることが多いものの、いくつかの議論では明示的に群集(大衆)が論じられ⁹、ル・ボンの群集心理学やカネッティの群集論の読み直しが試みられている¹⁰。こうした一連の理論的考察は、ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説の主要な論点のいくつかに触れながらも、決定的な点でそれらの言説から一線を画し、新たな理論的観点を導入している。そうした観点は、群集をめぐる言説の歴史研究にとっても、生産的な意義を持っている。というのも、それら近年の理論によってもたらされた観点からヴァイマル共和国時代の群集言説を振り返るとき、当時の言説が依拠し、またそれによって拘束されてもいた理論的布置の特徴がより鮮明に浮かび上がってくるからである。

本論考で試みられるのは、近年の理論に由来するいくつかの観点や概念的区分を確認したうえで、それらがヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説の分析に対していかなる寄与をなし得るのかについて予備的な考察を行うことである。本論考ではまず、ヴァイマル共和国の群集論の前提をなしていたル・ボンの群集心理学の特徴を概観し、それがヴァイマル共和国初期の群集をめぐる言説においてどのように受容されたのかを確認する。次にジュディス・バトラーの「集会」(assembly)と「蜂起」(uprising)をめぐる考察を、特にディスポゼッション(dispossession)の概念に注目して整理し、それをヴァイマル共和国の群集をめぐる思考と関係づける。そのさい本論考では、特に『群

Negri, Jacques Rancière. Gallimard/Jeu de Paume, Paris 2016. 廣瀬純(編著)『資本の専制 奴隷の反逆 「南欧」先鋭思想家8人に訊くヨーロッパ情勢徹底分析』、航思社、2016年。アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『叛逆 マルチチュードの民主主義宣言』(水嶋一憲、清水知子訳)、NHK出版、2013年(原著2012年)。

9 フアン＝ドミンゴ・サンチェス＝エストッパ「『大衆』は突破口を探し求めている——ギリシャとスペイン」、廣瀬純編著『資本の専制 奴隷の反逆』所収、144-184頁。

10 Jodi Dean. *Crowd and Party*, pp. 73-159. George Didi-Huberman. *By the Desires (Fragments on What Makes Us Rise Up)*, in *Uprisings*, pp. 322-327.

集とその行動』(1926年)で革命的群集を分析したテオドル・ガイガーの考察を取り上げる。

2. 群集心理学とその批判的受容

ジュディス・バトラーの考察をヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説と関係づけるのに先立って、まずはヴァイマル共和国時代の言説がどのようにル・ボンの群集心理学を受容したのかを簡潔に確認しておきたい。ル・ボンが『群集心理学』(1895年)で提出した命題の数々は、ヴァイマル共和国時代を通じて群集という主題と取り組む知識人や文学者にとって共通の参照点となっていた。特にドイツ革命の衝撃のもとで革命的群集を主題化した言説の多くは、ル・ボンの群集心理学を批判的に読み替える試みとして特徴づけることができる¹¹。ここでは本論考の主題に関わる範囲で、この点を確認しておきたい。

最初にル・ボンの群集心理学の要点を確認しておく。ル・ボンは群集を考察するにあたって、その後の群集論に決定的な影響を与えることになるいくつかの概念的区分を導入したが、そうした区分のうち最も基本的なものは、単なる雑踏と群集の区別である。様々な社会的出自や教養を持つ異質な諸個人が偶然ある場所に集積しただけでは、ル・ボンが「心理的群集」と呼ぶ群集は成立しない¹²。「ある特定の状況、しかもただこの状況のもとでのみ、人間の集積はそれを構成する各個人の性質とは異なる、新たな性質を持つ」こと

11 ヴァイマル共和国時代のドイツにおけるフランス群集心理学(ギュスターヴ・ル・ボン、ガブリエル・タルド)の受容のより包括的な考察として、次の論文を参照のこと。海老根剛「群集・革命・権力ー1920年代のドイツとオーストリアにおける群集心理学と群集論ー」、『ドイツ文学』130号、2006年、120-139頁。

12 「多数の個人が偶然に集まったという事実だけで、それらの諸個人に組織された群集の諸特徴が与えられるわけではない」。Gustave Le Bon, *Psychologie des foules*. Paris (Presses Universitaire de France) 1947, pp. 19-20.

になる¹³。この特定の状況とは、外部からの刺激や影響によって人々の感情や思考がただひとつの方向に導かれる事態を指しているが、そうした場合、諸個人の意識的な人格は消滅し、「確かに一時的ではあろうが非常にはっきりとした性格を示すひとつの集団精神 (*âme collective*) が形成される」¹⁴。ただこのときにのみ、単なる個人の総和とは異なる「単一の存在」として「心理的群集」、あるいは、「組織された群集」が成立するのである¹⁵。

このような群集の定義から、ル・ボンの群集概念にとって構成的なもうひとつの特徴が導かれる。すなわち、群集と個人とのラディカルな対置である。確かに群集を個人に対立させることは、ル・ボン以前のものも含めてあらゆる群集論に共通する要素である¹⁶。しかし、群集の諸性質はそれを構成する諸個人の性質からは導き出せないと主張することによって、ル・ボンは個人と群集の対立を極限にまで押し進める。「ある意見とは反対に、(…) 群集を構成する集合体のうちには、各分子の総和や平均のようなものはまったく存在せず、種々の新たな性質の創造と結合があるのだ」¹⁷。心理的群集の集団精神は、個人の心を律する諸法則とは異なる「群集の心的統一の法則」にしたがうのであり、この心的統一のもとで、各個人の社会的出自や教養などの差異はすべて意味を失い、群集化した諸個人は一人でいるときとはまったく異なる仕方であらうと考え、感じ、行動することになる¹⁸。ル・ボンにとって、群集の一員になることは個人であることをやめることであり、個人としての諸性質を保持しながら群集として行動することは不可能なのである。

こうした群集と個人のラディカルな対立は、さらにル・ボンの群集概念の三つの重要な側面と結びついている。第一に指摘すべきは、ル・ボンが群集

13 Gustave Le Bon, *ibid.*, p. 19.

14 *Ibid.*

15 *Ibid.*

16 Annette Graczyk: a. a. O., S. 6ff.

17 Gustave Le Bon, *op. cit.*, pp. 21-22. 強調引用者。

18 *Ibid.*, p. 19, p. 21.

化（個人が群集の一員になること）をラディカルな同質化のプロセスとして定義していることである。ル・ボンにとって、群集が異質な諸要素から構成されており、プロレタリアートのような共通の階級的属性に依拠していないことは自明であった。どんなに教養と分別のある個人でも、群集の一員になるや否や個人としての性質と能力を喪失し、群集に共通する特徴を帯びることになるのである。このラディカルな同質化のメカニズムを解明することが、まさしく群集心理学の主要課題のひとつとなる。

第二に、ル・ボンの群集概念は、個人と群集という両極への人間の諸能力のラディカルな再配置を含意している。群集化した個人のもとでは意識的人格が消滅するというル・ボンの指摘にはすでに触れたが、ル・ボンはまた、群集固有の特徴として「衝動性、興奮しやすさ、論理的思考能力の欠落、判断力と批判的精神の欠如、感情の誇張」¹⁹などを挙げている。これは裏を返せば、個人には論理的思考能力、判断力、批判的精神、感情や衝動を抑制する能力が帰せられるということを意味する。ル・ボンの分析において、個人と群集の対立は、意識と無意識、精神と身体、理性と感情、論理的思考と想像力の対立でもあるのだ。

したがって、ル・ボンの理論では、群集化するということは、主体のステータスを失うことを意味している。これが第三の重要な側面である。ル・ボンにとって、明瞭な意識と意志を備えた自由な行動の主体たりうるのは個人だけであり、群集は内発的な動因を欠いた客体的なものとみなされる。ル・ボンは『群集心理学』のいくつもの箇所、群集を客体的なものとして特徴づけている。たとえば、群集の一員となった個人について、ル・ボンは次のように書く。「個人はもはや彼自身ではなく、自分の意志をもって自分を導く力のなくなった自動人形である」²⁰。そして、これら群集化した個人からなる群集もまた、行動の主体とみなすことはできない。なぜなら、群集がいかにか活発

19 Ibid., pp. 26-27.

20 Ibid., p. 24.

に活動するとしても、それは決して主体的な行動（action）ではなく、外部からの刺激に導かれた反応（reaction）にすぎないからである。「外界のあらゆる刺激に翻弄される群集は、その不断の変化を反映する。そこで群集は受け取った衝撃の奴隷となるのだ」²¹。したがって、群集は行動するために外的な動因を必要とする。それが指導者である。ル・ボンはこうした群集と指導者の関係を催眠術のモデルを用いて説明した。「入念な観察はつぎのことを証明するように思われる。すなわち、活動している群集の内奥にしばらく身を沈めた個人は、——群集から発する放射のためか、それとも他の未知の原因によるのか——やがて特殊な状態に、催眠術師の掌中にある技術者の幻惑状態に非常に似た状態に陥るのである」²²。ル・ボンによれば、群集化した諸個人はいわば集団的な催眠状態に陥るのであり、催眠術を施された人間と同様に、意識的人格、意志、物事を区別する能力を失い、「感情と思考は催眠術師によって決められた方向へ向けられるのである」²³。この分析では、群集形成にはつねに催眠暗示をかける存在が不可欠であることになるが、その役割を担うのが指導者である²⁴。

ではヴァイマル共和国の群集をめぐる言説は、どのようにル・ボンの群集心理学を受容し、どの点でそれを読み替えたのか。1922年にフランクフルトでラーテナウ暗殺に抗議する労働者のデモに遭遇した体験を、カネッティは「意識の完全な変容」をもたらす陶酔的体験として回想しているが²⁵、ヴァイマル共和国時代の革命的群集をめぐる言説が主題化したのは、まさしく陶酔的

21 Ibid., p. 27.

22 Ibid., p. 24.

23 Ibid.

24 「人間の群集にあつては、指導者は重要な役割を演じる。指導者の意志は、その周囲に諸々の意見が形作られ、ひとつにまとまる核である。群集とは、統率者なしにはすまない群れなのである」。Ibid., p. 78.

25 Elias Canetti: *Die Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921-1931*. München u. Wien (Carl Hanser Verlag) 1980, S. 94.

な群集体験の持つポテンシャルであった²⁶。そうした言説にとってル・ボンの理論が重要だったのは、それが群集体験（群集化のプロセス）の分析を含んでいたからである。ル・ボンが、「意識的人格の消滅、無意識的人格の優位、暗示と感染による感情と想念の同一方向への方向づけ、暗示された観念をただちに行動に移そうとする傾向」²⁷として特徴づけた同件事象を、ヴァイマル共和国初期の群集論は、個体化原理を超えて高次の全体との合一にまでいたる可能性の開示として理解しようとした。これはル・ボンの群集心理学における催眠術に代わって、陶醉が群集体験の理論的モデルとなったことを意味する。そのさい群集心理学の催眠術モデルが群集体験を外部の視点から説明し、群集を操作の対象＝客体として位置づけていたとするなら、ドイツの群集論が依拠する陶醉モデルは群集体験を内部から提示し、そこに主体としての群集の可能性を（再）発見しようとする。ここでは、『群集とその行動』（1926年）で革命的群集を考察した社会学者テオドル・ガイガーの議論を取り上げ、そこでなされた群集心理学の読み替えを、本論考の関心に関わる範囲で簡潔に確認する。

ガイガーによる革命的群集の考察は、ル・ボンの群集心理学とマルクス主義の社会理論を革命の社会学の中で総合する試みとして整理することができるが、それはル・ボンの理論の概念布置を大胆に読み替えることで実現される。ガイガーはまず、異質な諸個人の偶発的集積としての雑踏と独自の性質を持つ心的統一体としての群集を区別したル・ボンの洞察を、プロレタリアート概念のアップデートに活用する。すなわち、ガイガーは単数形の *Masse* と複数形で表される *Massen* を概念的に区別し、前者を街頭に出現し行動の主体となる革命的群集、後者を社会の中で従属的な位置に置かれた人々の集合とし

26 革命的群集がもたらす陶醉的体験を主題化した言説の分析については、次の論文を参照のこと。Takeshi Ebine: Ekstasis. Zum Massendiskurs in der Weimarer Republik. In: *Neue Beiträge zur Germanistik*. 2004 Band 3, München (Iudicium), S.164-182.

27 Gustave Le bon, op. cit., S. 24.

て定義するのである²⁸。このとき、革命的群集がそこから形成される素材として位置づけられる Massen は、均質的な労働者階級ではなく、雑多な要素から構成される。すなわち、工場労働者だけでなく、失業者やルンペンプロレタリアート、社会の支配的な規範によって周縁化されていると感じている文士やボヘミアン（「主観的プロレタリアート」）、そして支配的な秩序に抵抗する知識人や学生なども、そこには含まれる。こうした人々に共通しているのは、政治的・経済的・文化的に「搾取され、権利を奪われた存在であるという運命」とそれを強いる秩序に対する「内なる反抗心」だけである²⁹。ル・ボンの洞察に依拠することで、ガイガーは革命的群集の担い手としてのプロレタリアートの概念を拡張しているのである。

次にガイガーは、こうした異質な諸要素を含む Massen からいかにして革命的群集としての Masse が生じるのかを論じるが、ここでもル・ボンの理論が大胆な仕方で援用されている。さきほど確認した通り、ル・ボンは群集形成をラディカルな同質化のプロセスとして定式化していたが、ガイガーも同様に革命的群集の形成をラディカルな同質化として特徴づける。ガイガーによれば、革命的群集は Massen を構成する諸個人の抱く社会秩序への反発が、ひとつの集団的な否定的意志に変容することで出現する。「苦痛の状態から、苦しみたくないという力動性が解き放たれ」³⁰、「権利を奪われた者たちの憎しみが、個人的・主観的な感情の領域を離れ、集団的な志向性に急変する」³¹のである。Massen を構成した異質な諸個人は、この集団的な志向性、つまり、既存の社会秩序に対する否定的意志において、同質化する。「群集体験のなかに個人の意識は没し去り、完全な同質化が起こる。自我の我々への統合が起こ

28 Theodor Geiger: *Masse und ihre Aktion*. Ein Beitrag zur Soziologie der Revolution. Stuttgart (Verlag von Ferdinand Enke) 1926, S. 40.

29 Ebenda, S. 45.

30 Ebenda, S. 73.

31 Ebenda, S. 73-74.

るのである」³²。こうして革命的群集としての *Masse* が形成される。

ガイガーにとって、このような群集体験は身体的で陶酔的な性質を備えている。「個人に備わる、感情を抑制する合理的な諸機能は、そこでは完全に排除されている。(…) そのことから結果として生じるのが、群集体験のなかにある人間を襲う、あの独特な、まさに肉体的と呼ばれるべき感覚である。この感覚は、暖かい湯のなかに身を沈める時の快い感覚とのみ比較しうるものである」³³。群集体験は、ガイガーによれば、強度に感覚的な、ほとんど肉感的とも呼べる質を持っている。個人は柔らかく暖かい物質のなかに身を沈めるように、群集のなかに沈み込む。この瞬間、個人は湯船や海で経験されるような独特な皮膚感覚に襲われる。そこでは自己の身体の内と外とのあいだの境界が曖昧になり、両者——内と外——が同じリズムで運動し始めるのだ。ガイガーにとって、群集体験の持つ忘我的・陶酔的な質の基礎はここにある。ついには完全な消滅にいたるそうした境界の不明瞭化のなかで、つねに境界画定を志向する個人の合理的な諸能力（物事を区別し批判する能力など）は失われ、個人は集団身体とそれを満たす感情に身を委ねることになるのである。「個人は群集行動のなかで我々（Wir）の道具となるが、その程度は、宗教的な幻覚を伴う忘我や(…) 集団的な舞踏病のような、他の集団的な忘我体験の行為の場合と変わらない」³⁴。ル・ボンが強調していた群集と身体や感情との結びつきが、ガイガーにおいては、群集体験の忘我的・陶酔的な性質の強調として見出される。

最後に私たちは、集団の否定的意志のもとでの諸個人の「自我の我々への統合」というガイガーの命題のうちに、群集の客体性に関するル・ボンの主張のラディカルな転倒を読み取ることができる。というのも、ガイガーは、ル・ボンの群集体験の分析を換骨奪胎することで、権力の客体の地位に甘ん

32 Ebenda, S. 123. 強調原文。

33 Ebenda.

34 Ebenda, S. 135-136.

じていた人々が行動の主体 („Wir“) となるメカニズムを定式化しようと試みているからである。ガイガーにとって、群集化のプロセスは、主体性の喪失ではなく、主体形成をもたらすプロセスなのである。したがって、ガイガーは、革命的群集を「行動の内的な力動性」によって特徴づける。「運動する群集は、それ自体として内的な活動状態にある。(…) 群集の活動は、攻撃的なものであり、街頭の人だかりのように反撥的ではない」³⁵。Massen から Masse への移行は、群集の主体化のプロセスにほかならない。しかし、ガイガーにとっても、群集は指導者と切り離すことのできないものであった。ただし、行動の主体となった革命的群集の指導者が、ル・ボンのそれと同じではありえないことは言うまでもない。それゆえガイガーは、「忘我的指導者」とでも呼ぶべきタイプの指導者を、冷静に群集を操る煽動者に対置することになる³⁶。

以上の考察からも明らかな通り、ガイガーはル・ボンの群集心理学をいわばその毛並みに逆らって読むことで、革命の集団的主体としての群集の理論を練り上げたのである。

3. ディスポゼッションと人々の共同行動

では人々の集団的な政治行動をめぐる近年の理論的考察は、上述したようなヴァイマル共和国の群集言説の分析にとってどのような意義を持つのだろうか。ここではそうした理論的考察の中からジュディス・バトラーの仕事をとり上げ、そこで提出された理論的観点を、いま簡単に考察したガイガーによる革命的群集の分析に関係づけてみたい。ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる言説のどのような側面が、それらの理論的観点の導入によってより鮮明に見えてくるのだろうか。

ジュディス・バトラーは、とりわけ 2010 年以降、世界各地の都市で起こった新しいタイプの抗議運動——ユーロ危機に直面したヨーロッパ諸国（ギリ

35 Ebenda, S. 35-36.

36 Ebenda, S. 149.

シャやスペインなど）における住民の抗議行動、「アラブの春」の反体制デモ、トルコのタクシム・ゲジ公園における抗議運動、アメリカを震源地とするオキュパイ・ウォールストリート運動など——に呼応するかたちで、人々の政治的な共同行動（acting in concert）を今日的な文脈において再考する仕事に取り組んできた³⁷。そうした仕事の中でなされた「集会」（assembly）や「蜂起」（uprising）についてのバトラーの考察は、ヴァイマル共和国時代の革命的群集をめぐる言説といくつかの点で類似を示しつつも、決定的な点ではっきりとした差異を示している。バトラーの理論的考察は、まさしくその差異において、ヴァイマル共和国の群集言説のいくつかの特徴的側面をより厳密に把握することを助けてくれる。ここでは「ディスポゼッション」（dispossession）という概念に注目しつつ、両者の違いを簡潔に整理してみたい。

バトラーはアテーナー・アタナシウーとの対談において、占拠やデモや集会といった人々の抗議行動の復権によって特徴づけられる近年の政治状況を考察する糸口として、「ディスポゼッション」（剥奪＝収奪）という概念を導入している。この概念は、私たちがつねにすでにそうであるところの存在様態（実存的カテゴリー）を意味すると同時に、今日の歴史的・社会的条件のもとでその存在様態が不均等に実現される仕方（不平等と貧困）をも指し示しており、この二つの意味内容を結びつけることで、今日の集団的な政治行動の条件を分析することを可能にしている。

ディスポゼッションという概念に含まれる第一の意味は、私たちがつねにすでに主権的な主体のステータスを剥奪されているということである。ここで主権的主体と呼ぶのは、外的な諸条件に依存しない自己充足的で自由な思考と行動の主体のことである。「第一の意味では、私たちは、他者とのある種の接触によって自分自身を剥奪されて（dispossessed）います。他なるものと

37 本論が特に参照するのは、次の著作である。Judith Butler, *Notes toward a Performative Theory of Assembly*, 2015. Judith Butler and Athena Athanasiou, *Dispossession: The Performative in the Political*, 2013. Judith Butler, *Uprising*, in Georges Didi-Huberman, *Uprisings*, 2016.

の遭遇によって動かされ、驚かされ、あるいは狼狽させられさえることで、自分自身を剥奪されるのです。この経験自体は、単に挿話的なものではなく、関係性（relationality）のひとつの基盤を露わにすることのできるものであり、実際にそれを露わにしています。私たちは単に動くのではなく、私たちの外部にあるものによって、他者によって、あるいはまた私たち自身のうちにある外部によって、動かされるのです³⁸。バトラーは自己充足的な自由な主体を自明の前提として受け入れる代わりに、私たちの生存の根本的に関係的なありようから出発する。私たちは、主権的な主体である前に、つねにすでに他者に、環境に、外部の諸力に晒され、それによって動かされており、その意味でつねに主権的な主体性を剥奪されているのである。このことは、私が他者によって完全に支配されていることを意味してはいないが、私が絶えず他者との関係に巻き込まれ、相互に触発し合っており、外部の環境や諸力に依存し、それらによって支えられていることを示唆している。たとえば、私たちの身体はそうした他者や外部の諸力との関係性の中である³⁹。私たちは私たちが見るもの、聞くものによって触発され、動かされるだけでなく、私たちがコントロールすることのできない他者の眼差しによって知覚され、そのパースペクティブの中で自己が想定するのとは異なる仕方で位置づけられる⁴⁰。また、私たちの行動はすべて環境の支えを必要としており、例えば空間を移動するためには技術的なインフラストラクチャーに支えられる必要がある。さらに私たちが自由な行動の主体として現れ得るためには、個人に対して諸々の権利を保障する法秩序によっても支えられる必要がある。すなわち、自己充足的で自由な行動の主体というものの自体、関係的で相互依存的な存在様態、主権の主体性を剥奪された状態をみずからの成立の前提条件にしているのである。こうした私たちの関係的で依存的な存在様態を、バトラーは「プレカ

38 Judith Butler and Athena Athanasiou, *Dispossession: The Performative in the Political*, pp. 3-4.

39 Judith Butler, *Notes toward a Performative Theory of Assembly*, pp. 129-131.

40 Ibid., p. 97.

リアスネス」(生の脆弱性)と呼んでいる⁴¹。

しかし、他方において、ディスボゼッションの概念はまた、今日の政治的・経済的状况のもとでますます多くの人々が陥っている状態、すなわち土地や市民権や生活手段や公共サービスを奪われ、差別や法的暴力に晒されている状態をも意味している。バトラーはそうした生存を脅かす不安定性を「プレカリティ」(precarity)と呼び、実存的カテゴリーとしての「プレカリアスネス」(precariousness)から区別する⁴²。そのさい重要なのは、この第二の意味のディスボゼッション(プレカリティ)が、第一の意味のディスボゼッション(プレカリアスネス)と固く結びついていることである。というのも、第二の意味のディスボゼッションが社会の中で不平等と貧困を不均等に配分する権力の効果であるとすれば⁴³、この権力の作用は私たちが主権的な主体ではなく、外部の諸力に晒され、それに依存する存在であることによって条件づけられているからである。「私たちが土地や生活手段、住居や食料や保護を奪われうる存在だとするなら、また私たちが市民権や住まいや諸々の権利を失うとするなら、そのとき私たちは、私たちを生きながらえさせたり、私たちから収奪したりする諸権力に根本的に依存していることになります。まさしく私たちの生存に対してある種の力を振るう諸権力に依存していることになるのです。私たちが諸々の権利を所有する場合でさえ、私たちはそうした権利を与え、維持する統治の様態と法的体制に依存しています。そういうわけで、私たちは、私たちの土地や権利や所有の様態を奪われる可能性に先立って、すでに私たち自身の外部にいます。言い換えれば、私たちは相互依存的な存在であり、その喜びと苦しみは最初から、維持された社会的世界、生を維持する環境に依存しているのです。(…)したがって、すべての生は、この意味で、最初からそれ自身の外部にあるのであって、強制的・収奪的な

41 Judith Butler and Athena Athanasiou, op. cit., p. 20.

42 Ibid.

43 Judith Butler, *Notes toward a Performative Theory of Assembly*, p. 96.

意味での生の「ディスポゼッション」は、それを背景にしてのみ理解可能で
す。私たちはすでに〔自己充足的な主体のステータスを〕剥奪されている (be
dispossessed) がゆえに、〔権力によって〕収奪されうる (can be dispossessed)
のです」⁴⁴。

しかし、私たちの関係的な存在様態としてのディスポゼッションは、私た
ちに権力への依存と服従を強いるだけではない。バトラーによれば、それは
同時にまた権力に対する抵抗を可能にする条件でもある。なぜなら、私たち
がつねにすでに他者との関係に巻き込まれており、他者と触発し合う関係に
置かれているならば、そこにはつねに他者の生に対して応答する可能性も
また与えられているからである。「剥奪されていること (being dispossessed)
には、倫理的な関係性を可能にする非常に特別な様態が存在する」⁴⁵。バト
ラーは、このディスポゼッションに根ざした倫理的関係性を「応答可能性」
(responsiveness) と呼び、そこに権力への抵抗において他者と連帯する可能性
の契機をみる。「応答可能性」は主体間の応答関係としての責任 (responsibility)
に先行する、関係性の場としての身体に依拠した倫理的関係である。バトラー
は、占拠やデモや集会といった人々の共同行動を、関係的存在としての私た
ちの身体の応答可能性に立脚した政治的実践として理解するのである。主権
的な主体性を剥奪されていることのうちに人々が共同で行動する可能性の条
件を見るバトラーの立場は、主体のステータスの獲得を革命的群衆の成立条
件とみなすガイガーとは対極的である。

見るもの、感じるもの、知ることになるものによって動かされるという
苦境は、自分がどこか別の場所へ運ばれるのを見出す苦境であり、自分
が別の場面へ、あるいは自分がその中心ではない社会的世界へと運ばれ
るのを見出す苦境である。そして、こうしたディスポゼッション〔剥奪〕

44 Judith Butler and Athena Athanasiou, op. cit., p. 4-5. 括弧内は引用者による補足。

45 Judith Butler, Notes toward a Performative Theory of Assembly, p. 110.

の形式は、行動と抵抗のもととなる応答可能性の形式として、すなわち不公正の終わりを要求する努力の中で他者たちとともに現れることのもととなる応答可能性の形式として構成される。不公正のひとつの形態は、例えば、強制移民、失業、ホームレス、占領や征服による人々の組織的なディスボゼッション〔収奪〕である。それゆえ、私たちは、いかにして主権的な自己を剥奪されて（dispossessed）、（…）ディスボゼッション〔収奪〕の諸形式に抵抗する集団性の諸形式に入るのかという問いに取り組むのである⁴⁶。

それでは集会やデモや蜂起といった人々の共同行動をめぐるバトラーの考察を、すでに確認したガイガーによる革命的群集の分析と関係づけながら、より詳細に確認してみたい。

ガイガーは革命的群集の構成要素となる諸個人の異質性を強調し、それを Massen という概念で表していたが、同様にバトラーにとっても——上述の引用部分からも分かる通り——集会やデモなどの共同行動に参画する人々は決して均質的な集団に属してはいない。今日、「収奪の時代」⁴⁷の権力によって生存の不安定化に晒されているのは、非正規雇用の労働者、市民権を持たずに生活する移民たち、失業者やホームレス、人種的・性的マイノリティなど多様な人々だからである。したがって、集団を構成する人々の異質性という点では、両者の見解は共通していると言うことができる。

しかし、こうした多様な人々が、それぞれの差異にもかかわらず、みずからのプレカリティを共有された苦境として認識することで連帯し、共同行動に参画するとき、バトラーは——ガイガーとは対照的に——そこにいかなる同質化の力学的作用をも認めない。個人と群集のラディカルな対立という群集心理学の枠組みを前提していたガイガーとは異なり、主権的な主体性の剥

46 Judith Butler and Athena Athanasiou, op. cit., p. xi. 括弧内は引用者による補足。

47 廣瀬純「搾取の終焉、勇気の時代」、『暴力階級とは何か』所収、航思社、2015年、6-17頁参照。

奪にもとづく応答可能性を共同行動の条件とみなすパトラーにとって、集団の行動は個人の存在様態と何ら矛盾しない。人々の共同行動はむしろ互いに触発し合い、応答し合う一人ひとりの差異を孕んだ関係から力を得ているのである。したがって、パトラーは共同行動に参画する際になされる経験を、陶酔的体験における同質化から明確に区別する。「この運動と静止、こうして私の身体を他の人々の行動の直中に預けることは、私の行動でもなければあなたの行動でもない。それは私たちの関係によって起こる何かである。それはそうした関係から生じ、私と我々の間で言葉を濁し、この曖昧さ、活動的で慎重に維持される関係、すなわち幻覚的な同化や混合とは明確に異なる共同活動の持つ産出的な価値を維持すると同時に拡散させようとする」⁴⁸。パトラーが人々の共同行動を「互いに異なる諸行動の収斂、一律性（conformity）には還元できない政治的社会性の一形式」として特徴づけ⁴⁹、群集の動きを次のように分析するとき、そこにはヴァイマル共和国時代の群集をめぐる理論的言説には見出せない記述の解像度がある。「たとえば群集が一緒に言葉を発するときでさえ、彼らは互いの声を聞き、各人の発声のテンポを測り、十分な程度のリズムと調和を達成するために、十分に近くに集まっていなければならない。そうすることで、意味作用を持つ行動や言語行為を共に行う人々との聴覚的・身体的な関係が実現されるのである。いま私たちは話し始める、そしていま話すのをやめる。私たちはいま、あるいは、多かれ少なかれ定められた時に動き始める。しかし確かに単一の有機体として動くのではない。私たちは一斉に立ち止まろうとするが、誰かが動き続けており、さらに他の人々は自分自身のペースで動き、停止する。時間的な連続と調整、身体的近接性、可聴範囲、調整される発声——これらのものすべてが、集会とデモの本質的な諸次元を構成している」⁵⁰。

48 Judith Butler, *Notes toward a Performative Theory of Assembly*, p. 9. 強調引用者。

49 *ibid.*, p. 178.

50 *Ibid.*

人々の共同行動についてのバトラーのこうした記述は、集会やデモにおいて共同して行動する身体の還元不可能な多数性を強調する。共に行動する人々の身体の多数性は、言語によって打ち立てられる統一的主体の表象（「我々」や「人民 the people」）への還元抵抗する。そして、この統一的主体の表象への抵抗のうちに、バトラーは共同行動のパフォーマティヴな側面、すなわち上演（enactment）としての側面を見出す。群集の行動において異質な諸個人は否定的意志において同質化し、「我々」へと統合されると主張したガイガーとは対照的に、バトラーにとって集会やデモのような共同行動は、しばしば参加者たち自身によって言語的に文節化される「我々」や「人民」の表象と、人々の身体が上演する人民の意志とが「交差配列的」（chiastic）⁵¹に切り結ぶ場であり、言語的表象（representation）はそこで身体の多数性に立脚した上演によって問い直されるのである。「おそらくより適切に言うならば、集会はそれが言葉を発する以前にすでに話しているのである。人々が集まることによって、それはすでに人民の意志の上演である。この上演は、単一の統一された主体が声に出して言う陳述によってその意志を表明するのとは極めて異なる仕方で意味作用する。言語によって言われる「我々」は、すでに複数の身体集合によって、それら身体の身振り動きによって、それら身体が発声によって、そしてそれら身体が共同で（in concert）行動する仕方によって上演されている。共同して行動することは、一律に（in conformity）行動することを意味しない。人々は同時にいくつかの異なる方向に、それどころか異なる目的に向かって、動いたり語ったりしているかもしれないのだ。また、それは人々が正確に同じ言葉を話すことを意味してもいない」⁵²。

集会やデモといった人々の共同行動が人民の意志の上演という側面を持つことは、そうした行動が単に言語によって表象される統一的主体の要求を表明するだけでなく、そこで要求されているものを身体の多数性において先取

51 Ibid., p. 180

52 Ibid., p. 156-157. 強調原文。

的に実現することを意味している。プレカリティに晒された人々が広場を占拠し、そこに居座り、そこで寝泊りし、抗議を継続するとき、人々は公共空間をみずからの手に奪い返し、そこで相互的な援助と差異を肯定する対等な関係に立脚したオルタナティブな空間を、パフォーマティブに作り出すのである。その意味で、そうした集会は人民主権の萌芽的な行使である。「ますます個人化される不安と失敗の感覚に抗して、公共の集会は次のような洞察を具体的に示す。すなわち、これは共有された不当な社会的状態であるということ、そして集会は、〈自己責任化〉(responsibilization) に対する明確な倫理的・社会的オルタナティブを構築する、暫定的で多数的な共生の一形式を上演しているということである。私が示唆したいと思っている通り、集会のこうした諸形式は、人民主権の萌芽版・暫定版として理解できる」⁵³。したがって、バトラーは人々の共同行動における表象と上演の対立を、人民の意志を上演する人民主権 (popular sovereignty) と人民の意志を代表＝表象する国家主権 (state sovereignty) の対立として捉え直し、人々の共同行動のうちに人民を代表＝表象する国家主権に対する批判を見ることになる⁵⁴。このようなバトラーの議論を参照するとき、ガイガーの革命的群集の考察が、群集行動の身体性とそこに参画する諸個人の異質性を強調しながらも、最終的には事後的な言語操作によって、身体の多数性に根ざした実演の次元を否認し、それを統一的主体の表象(「我々」)に回収してしまっていることが明らかになる。

すでに確認したように、群集心理学に由来する個人と群集のラディカルな対立とこの両極への諸能力の再配置を前提していたガイガーにとって、群集の行動は既存の社会秩序に対する純粋な否定的意志と「苦しみたくない」という感情のみによって駆動されており、そこには合理的な諸能力(認識や判断力)が介在する余地は一切存在しなかった。群集の革命的な力能は、陶醉の破壊的エネルギーとして解き放たれるのである。一方、すでにこれまでの

53 Ibid., p. 15-16.

54 Ibid., p. 160-164.

考察からも明らかな通り、バトラーにとって、人々の共同行動の可能性は、主権的な主体性の剥奪（ディスポゼッションの第一の意味）にもとづく私たち一人ひとりの応答可能性に立脚しており、個人の行動と集団の行動との間には根本的な断絶は存在しない。したがって、バトラーの考察は個人と集団からなる両極への諸能力の再配置も認めない。人々の共同行動のうちで発揮される諸能力は、一人ひとりにおいて作動している諸能力と連続的である。人々がみずから晒されている政治的・経済的収奪（ディスポゼッションの第二の意味）に抗して連帯し、共同的な行動のもとに集まるとき、それは単なる感情の「感染」ではなく、身体化された認識と判断力の所産でもあるのだ。本論では最後に、美術史家のジョルジュ・ディディ＝ユベルマンがパリのジュ・ド・ポーム国立美術館で企画監修した展覧会（「蜂起」展⁵⁵）のカタログにバトラーが寄稿した蜂起論を参照することで、この点を簡潔に確認しておきたい。

このエッセイの冒頭でバトラーは、蜂起（uprising）が一個人の行動でも、諸個人の行動の単なる集積でも、何らかの集合的主体の行動でもないことを指摘しているが、同時また、蜂起が怒り（indignation）の感情だけでなく、認識（recognition）をも必要としていることを強調している。「蜂起が起こるとき、その行動の一部をなすのは諸個人である。しかし、その行動は社会的・政治的な形状と意味を備えている（…）。そうした社会的行動では、いかなる個人も一人で行動しないが、あらゆる諸個人の差異を否定するひとつの集合的主体が出現するわけでもない。蜂起は私の怒りから湧き上がるのでも、あなたの怒りから湧き上がるのでもない。蜂起する人々は、自分たちが不当な仕方です苦しんでいることを認識して、一緒に蜂起する。したがって、蜂起は、個人の苦しんでいる事柄が共有されているという認識だけでなく、集団が限界について共有された感覚の彼岸で生きているという認識をも必要とする」⁵⁶。

蜂起は人々の怒りの感情が認識によって補完されるときにのみ生起する。

55 展覧会は2016年10月18日から2017年1月15日まで開催された。

56 Judith Butler, *Uprising*, in Georges Didi-Huberman, *Uprisings*, 2016, pp. 23-24.

ただし、この認識は社会状況の詳細な分析のような理論的認識ではない。「必要とされることのすべては、(…) 耐えがたい仕方では苦痛を要求する、ある特定の体制のもとで生きているという感覚であり、これは耐え忍ばれるべきではないという理解、そしてこの主張は自分自身にとってのみならず、この権力の中で似たような状況に置かれている他の人々にも当てはまるという理解である」⁵⁷。こうした認識は、日々の生活の中で繰り返される服従と密かな抵抗の経験を通して、長い時間をかけて形成される。そして、それは感情と身体感覚に切り離しがたく結びついた認識である。こうした観点から、バトラーは蜂起を突発的で非合理的な感情の暴発とみなす立場に批判を加える。「蜂起を自発的かつ非合理的な爆発として示そうとするいくつかの努力にもかかわらず、蜂起はしばしば、だんだんと兆し始め拡張していく認識の長く燃り続けるプロセスの結果である。蜂起は実際にそれが起こる以前に、形作られ、形をとってきたのである。〈非合理的なものの反乱〉として蜂起を退け恐れる者たちは、認識と判断のプロセスを抵抗の本能的な (visceral) プロセスから分離できると想定しているのだ」。ラディカルな同質化を実現する群集体験の非合理性 (陶酔的・忘我的性質) のうちに革命的群集のポテンシャルを認めていたガイガーとは対照的に、バトラーにとっては、蜂起を日々の身体的経験に根ざした認識のプロセスから切り離さないことが重要である。というのも、すでに確認した通り、人々の共同行動は耐え忍ばれるべきではない服従に対する抵抗であるだけでなく、あるべき社会的関係のパフォーマティヴな実現でもあるからである。このオルタナティヴな共生の可能性の上演は、日々の経験の中で形作られる認識を前提する。ディディ＝ユベルマンが指摘する通り、蜂起とは単なる否定や拒否ではなく、別の仕方では存在しようとすることであり、別の仕方では物事を行おうとすることである⁵⁸。そのようなものとし

57 Ibid., p. 25.

58 George Didi-Huberman. *By the Desires* (Fragments on What Makes Us Rise Up), in *Uprisings*, p. 344.

て蜂起を考えるならば、たとえ革命的なポテンシャルを認めるためであろうとも、蜂起を非合理的なものの爆発とみなすことはできないのである。

そのような蜂起の直中で起こる変化を記述するバトラーの言葉は、ガイガーの群集体験の記述を若干想起させる。「蜂起の直中でパースペクティヴの変化が起こる。私が苦しんでいるだけではなく、あなたも苦しんでいるのであり、あまりにも長く耐え忍ばれ、いまや終わることを求められている服従の形式の広く行き渡った組織的な性質を認識することで、ある種の〈我々〉が形成される」⁵⁹。しかし、この「我々」はガイガーが革命的群集のうちに見出したような統一的な主体ではない。すでに確認したように、人々の共同行動が上演する人民主権は、身体の複数性に根ざしており、統一的主体の表象に抵抗するからである。したがって、バトラーが語る身体化された(embodied)認識や判断もまた、身体の複数性を前提している。蜂起する「我々」の認識と判断は、応答可能性によって連帯する身体の多数性に立脚しているのだ。「蜂起が起こるのは、人々が集まり始め、動き、現れ、彼らの服従に対して責任のある体制や権力を廃止しようと行動し始めるときである。この集合、動き、現れ、行動は、拒否する怒りによって、服従が行き過ぎているというだけでなく、それが不当であるという判断によって、形づくられる。蜂起とは、いかなる集合的な主体も存在しないという条件のもとでなされるそうした判断の身体化された集団的形式である。それは共有され、人々の間を巡回する判断、異質であるが共同的であり、それぞれ異なる仕方で身体化されているが、共通してもいる判断である」⁶⁰。

主権的な主体としての個人ではなく、主権的な主体性の剥奪(ディスボゼッション)から出発するバトラーの考察をヴァイマル共和国時代の群集言説と

59 Judith Butler, *Uprising*, in Georges Didi-Huberman, *Uprisings*, pp. 26.

60 Ibid., pp. 28-29.

突き合せるとき、あらためて鮮明に浮かび上がるのは、当時の群集をめぐる言説がいかに主権的主体の概念に立脚し、それによって拘束されていたかということである。すでに本論の冒頭で触れたように、スローターダイクは群集という主題が近代社会に固有の文化闘争と密接な関係にあることを指摘したが、そこで争われていたのは、群集に対して主体のステータスを承認することは可能か否かという問いであった。そして、これもすでに簡潔に確認したように、ル・ボンの群集心理学は、この問いに全否定で答えたのだった。群集心理学では、主権的主体の諸能力——論理的思考能力、判断力、批判的精神、感情や衝動を抑制する能力——は個人にのみ帰属するものとされ、群集はそうした能力を完全に欠いた存在、したがってまた純粋な客体性によって特徴づけられる存在として定義された。この群集心理学を批判的に受容したヴァイマル共和国時代の言説は、主権的主体の諸能力が個人に帰属するものであることを認めつつも、革命的群集を考察するにあたってル・ボンの群集形成の図式をラディカルに読み替え、陶酔的な群集体験の中に群集の主体化の契機を見出そうとした。つまり、従属的な地位に押し込められた雑多な諸個人は、群集体験の直中で社会秩序に対する否定的意志において同質化し、集合的な主体としての「我々」へと統合される。これによって政治的行動の主体としての革命的群集が成立するのである。もちろん、この革命的群集はもっぱら否定的意志と「苦しみたくない」という感情によってのみ突き動かされており、十全な主権的主体と呼ぶことはできない。それゆえ、ガイガーは革命的群集に対して既存の秩序の破壊という限定的な役割のみを認め、新しい社会秩序の建設は組織されたプロレタリアートの仕事とみなしていた⁶¹。それにも関わらず、ガイガーにとって重要だったのは、たとえ不完全なものであっても、群集に主体のステータスを承認することであり、それによって革命的群集の行動に正当な政治的意義を認めることであった。ル・ボンの群集心理学もヴァイマル共和国時代の革命的群集をめぐる言説も、主権的主体

61 Theodor Geiger: *Masse und ihre Aktion*. S.53.

としての個人から出発している点では同じ思考の枠組みを共有しており、群集にも主体のステータスを承認するか否かという点でのみ対立しているのである。

スローターダイクは件のエッセイにおいて、「疑似的解放および不完全な主体性（Halbsubjektivität）の状態にあるものとして以外には、群集を見出すことは不可能である」と断言した⁶²。ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる思考の枠組み——それは20世紀の群集論全体の枠組みとも通底している——のもとで考える限り、この断言に反論の余地はない。しかし、不完全な主体性を個人の十全な主体性からの逸脱や退行とみなして群集に帰属させるかわりに、個人と集団をめぐる思考の共通の出発点に置くとしたら、何がでてくるのだろうか。バトラーのディスポゼッションの理論は、そうした問いへの端緒を開いている。ヴァイマル共和国時代の群集をめぐる文学的表象は、本論で扱ったような理論的言説よりもはるかにニュアンスに富んだ集団のダイナミズムを描き出している。そこに描かれた不完全な主体性を新たな視点から捉え直し、そこに潜在しているかもしれないポテンシャルを検討することが、今後の課題である。

【付記】本稿は2016年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「ディスポゼッションと複雑性の理論に基づくヴァイマル共和国時代の群集表象の再検討」によって実施された研究成果の一部である。

62 Peter Sloterdijk: *Die Verachtung der Massen*, S.13-14.